

「空の下に 自在空間」というキャッチフレーズのもと、新しく誕生した『ミューテリア』は、先進性のある創造的な新空間を提案いたします。専門家達に様々な角度からその意義を語っていただきます。

中庭 — 住まいの内と外

白幡 洋三郎

中世ヨーロッパの住まいは壁が厚く窓が小さく「真っ暗」だった

ヨーロッパの住宅は明るい外光とともに暮らすイメージが強い。バルコニー、テラス、サンデッキなどという言葉が思い浮かぶように、屋外を日々の暮らしにうまく取り込んだ装置が発達していると思われる。舗道に突き出したカフェで新聞を読みながらコーヒーを楽しんでいる人々の姿もまたヨーロッパのイメージの中にある。

けれどもこのようなさわやかな戸外での暮らしがヨーロッパの都市生活に入ってきたのはせいぜい100年ほど前からのことだ。第1次大戦が終結した1910年代の末以降、戸外での生活が多くの人々にとっての理想になりはじめたのだ。

もともとヨーロッパの暮らしは厚い壁で囲まれた住宅の中が基本だった。中世ヨーロッパの住宅内部は、現代人の感覚で言えば「真っ暗」で、人々は暗闇の中でうごめいていた、といわれる。

ヨーロッパの住宅構造は日本のような木の柱や梁（はり）に

よる軸組構造とは違い、組積造（そせきぞう）が基本だった。組積造とは石やレンガなどのブロックを積み上げて壁をつくり内部空間を創出するもの。したがって軸組構造なら壁がなくても自立できるが、組積造の場合荷重をささえるのは壁であり、壁は荷重に耐えられるだけ厚さが求められた。組積造の住宅は必然的にとても厚い壁を持つことになる。

レンガや石で分厚く築かれた住居の出入り口は狭く、窓は小さかった。壁が厚く窓が狭いと屋内に差し込む光の量は極端に少なくなる。その時代は照明もきわめて貧弱である。そこでヨーロッパの家族は暗闇の中でお互いの顔をおぼろげにたしかめ合いながら暮らしていたといわれるのである。

光の魔術師フェルメールから印象派モネ、ゴッホへ 絵画にみる陽光への強い憧れ

「光の魔術師」と呼ばれるオランダの画家フェルメールの絵をみると、室内に差し込む光がじつに印象的に描かれている。彼の絵に現れる室内は、17世紀になり中世的な暗い住宅から抜け出したオランダの市民生活の室内である。それでも画面をよく見ると、陽光に輝く室内というわけではなく、精一



サン・ジョバンニ・イン・ラテラーノ大聖堂のキオストロ(中庭)



サンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会のキオストロ(中庭)、ガリレオが「それでも地球は回っている」とつぶやいたというガリレオ裁判の舞台

杯確保された小さな窓から弱々しい日の光が差し込んでいるといった程度である。

それから2世紀、19世紀になるとモネやゴッホ、シスレーなど印象派の絵画がそれこそ太陽がいっぱいの室外を描きはじめることになる。こうした陽光への強い願望が住宅そのものに向けられ、今日の明るいヨーロッパの住宅が出現しはじめるのである。

ただし、室内の暗闇で過ごしていたヨーロッパの中世人たちも、一歩外に出ると輝く陽光が手に入ることはもちろん百も承知だった。彼らがつくりだした屋内であり屋外である場所、住まいの内であり外である空間……それが「中庭」である。

修道院中庭「キオストロ」は陽光と緑が輝く、外であり内である空間

ヨーロッパのキリスト教の教会、とくに修道院を旅すると美しい珠玉のような中庭に出会えることがある。ゲルマン語系では「クロスター」、ラテン語系では「キオストロ」などと呼ばれる、回廊付きの中庭が教会・修道院に多く備わっている。ただしプロテスタントの教会が多い北ヨーロッパにはきわめて少なく、南ヨーロッパの

カトリックの修道院ではよく目にする事ができる。

私はイタリアでたくさんの修道院中庭「キオストロ」に出会った。シチリア島モンレアーレの大修道院では、ローソクが揺らめく薄暗い礼拝堂を出て、南イタリアの明るいというよりは強烈な陽光に輝く緑の中庭に驚かされた。堂内は空間が暗いだけでなく、宗教的な雰囲気の高さも加わって、息苦しさを感ずる。ところが中庭、キオストロに一歩出るとどうだ。回廊に囲まれた四辺形の緑の芝生には、そよ風に乘ってくる若葉の香りがする。

ここはしかし屋外とはいえない。周囲は建物に囲われ、繊細な彫刻が施された列柱が並び回廊が取り巻く。外であり内であるのがキオストロだ。

ミラノの南に位置するバヴィアの町の修道院にも心を揺すぶられる中庭がある。ここにあるのは大小の少し性格の違うキオストロ。小さい方の回廊、キオストロ・ピッコロは33メートル四方の花咲き乱れる中庭である。回廊の周囲には食堂、図書室などが並んでいる。修道士たちの共用空間であるが、いかにも思索で沈み込んだ気分を励まし元気づけるような生氣あふれる空間である。